

# がん細胞を選択破壊

29.2. 2冊(13)

がん細胞を選択的に破壊できるがん治療法「ホウ素中性子捕捉療法(BNCT)」の実用化が迫っている。研究を先導してきたのが京都大学であり、関西地域は同大学を中心に研究者や関連企業によるネットワーク化も進む。将来的な治療技術の向上や適用部位の拡大も期待されており、連携の輪がBNCT発展の礎となる。

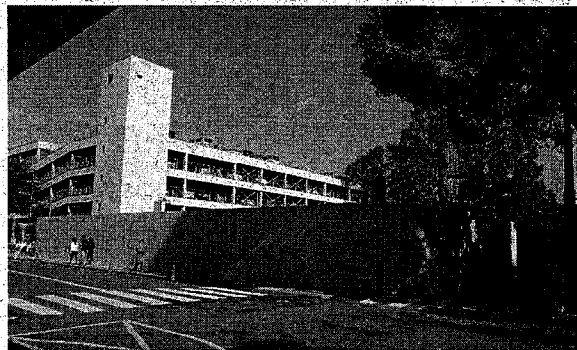
(3回連載)

## BNCT 中性子ホウ素捕捉療法 広がる連携

西BNCT医療センター 設け、治療室に住友重工業(仮称)の建設が機械工業製の小型BNCT用加速器(サイクロトロン)を導入する。国を挙げて

小型加速器  
地下1階・地上3階、延べ床面積4017平方メートルの同施設は1

大阪医科大学を運営する学校法人大阪医科



大阪医科大学 大阪府熊取町)なども関西地域で進める。同センターの設立にむかひ、関西BNCT研究センター(堺市中区)など連携。研究ネットワークの「土台」とい位置付けでもある。BNCTの推進・発展を図りたい(植木理事長) 考えた。

現在、BNCTは悪性脳腫瘍と頭頸部がんを対象にした治療が進められている。新施設の整備が医師や看護師、放射線技師などの治療に携わる人材育成にも寄与している。植木理事長は「がん治療に特化した素晴らしい人材を世に送り出す」と熱意を語る。

## 研究ネットワークの「土台」

大阪府高槻市にある大阪医科大学。同大学のキャンパス内に「関

### 新拠点を開設

大阪医科大学の植木理事長は、「国を挙げてがん治療に取り組む」と施設を開設の意を込めて説明する。同センターは大阪府高槻市にある。BNCTはこれまで、日本政策投資銀行、科薬科大学が「共同利得治療が困難だったが」と三井住友銀行、池田泉州銀行が55億円の協

同センターは大阪府高槻市にある。BNCTはこれまで、日本政策投資銀行、科薬科大学が「共同利得治療が困難だったが」と三井住友銀行、池田泉州銀行が55億円の協